

試験研究成果普及情報

部門	果樹	対象	普及
課題名：種子なしビワ専用品種「 <small>きぼう</small> 希房」の育成			
<p>[要約] 種子なしビワ品種「希房」は二倍体と四倍体の交雑によって得られた三倍体品種である。種子がない分、種子ありビワより果肉重割合が20%多い。糖度及び酸度は従来品種と変わらず、果肉は軟らかく多汁である。ハウス栽培に適しており、収穫期は5月下旬である。</p>			
<p>キーワード（専門区分） 育種 （研究対象）果樹類 - ビワ （フリーワード）三倍体、ビワ、種子なし果実、ジベレリン、ホルクロルフェニユロン、希房</p>			
<p>実施機関名（主査） 農業総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 （協力機関）農業総合研究センター 生物工学部 植物工学研究室 （実施期間）1997年度～2004年度</p>			

[目的及び背景]

ビワは種子の占める重量割合が15～20%と極めて高く、消費者からは無種子化が望まれている。そこで、三倍体を利用した種子なしビワの作出技術（2003年度成果普及情報）を用いて、三倍体品種の開発を行う。

[成果内容]

1. 育成経過

暖地園芸研究所において、1991年に四倍体の「田中」実生を母親として「長崎早生」を交雑し、得られた実生の倍数性を確認した後、三倍体個体のみを高接ぎして果実形質の特性調査を行った。1999年に初着花、2002年に優良系統として選抜した。

2. 品種特性

- ・樹勢は強で、枝梢は太く毛じが多い。葉は対照品種「富房」より厚く、大きい。花はやや大きく、開花しても自然状態ではほとんど結実しない。種子なし果実を得るためには、200ppmジベレリン(GA₃)と20ppmホルクロルフェニユロンを混用した水溶液にビワ花(果)房を開花期と幼果期の2回浸漬処理する。1回目の処理は開花1週間前～満開期に行い、その35～60日後に2回目の処理を行う。
- ・果形は長卵形を示す。果皮色は橙黄色でやや赤味を帯びる（写真1）。1果平均重は69gで、「富房」よりやや小さいが、果肉重割合は91%と「富房」より20%多くなる。糖度及び酸度は「富房」と同程度、肉質は軟らかく果汁に富む（表1）。
- ・果心部の子室及び萼筒がくとうの内部に空隙が生じる。萼片も肥大する（写真2）。
- ・開花期は暖地園研ハウス栽培において11月中旬～12月下旬、果実の成熟期は5月下旬で、いずれもハウス栽培の「富房」より遅い。

[留意事項]

本品種は加温ハウス内で栽培することによって、安定した着果と果実肥大及び品質が得られる。

[普及対象地域] 県下のハウスビワ生産者

[行政上の措置] 品種登録出願を平成15年9月に行い、平成16年4月に出願公表された。

[普及状況] 平成16年12月に「JA安房温室びわ組合」と利用許諾契約を締結した。

[成果の概要]

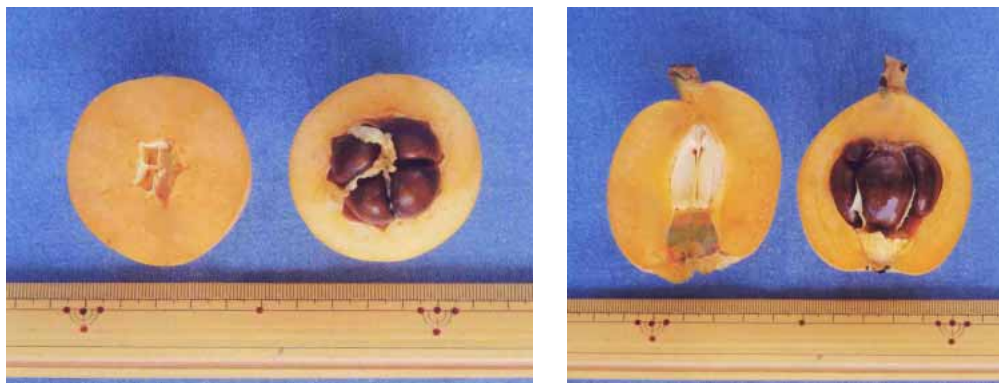
表 1 「希房」の果実特性

(施設栽培樹、1999～2003年平均)

品種(倍数性)	収穫期 (月・旬)	平均 果重 (g)	果肉重 割合(%)	果形	果色	緑斑	糖度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)	果肉 硬度
希房(3倍体)	5.下	69	91	長卵	橙黄	軽	11.5	0.22	軟
富房(2倍体)	5.上	72	71	短卵	橙黄	無	11.6	0.21	中



写真1 「希房」の樹上果実



果肉の厚さは1.5～2倍に増加

果実中央部に空隙

写真2 「希房」果実の横断面と縦断面(左:「希房」、右:「富房」)

[発表及び関連文献]

- ・生育調節剤が三倍体ビワの無核果実の形質に及ぼす影響、園芸学会雑誌、第67巻(別2)、1998年
- ・三倍体を利用した種子なしビワの作出技術、成果普及情報、2003年

[その他] 新品種育成強化促進事業